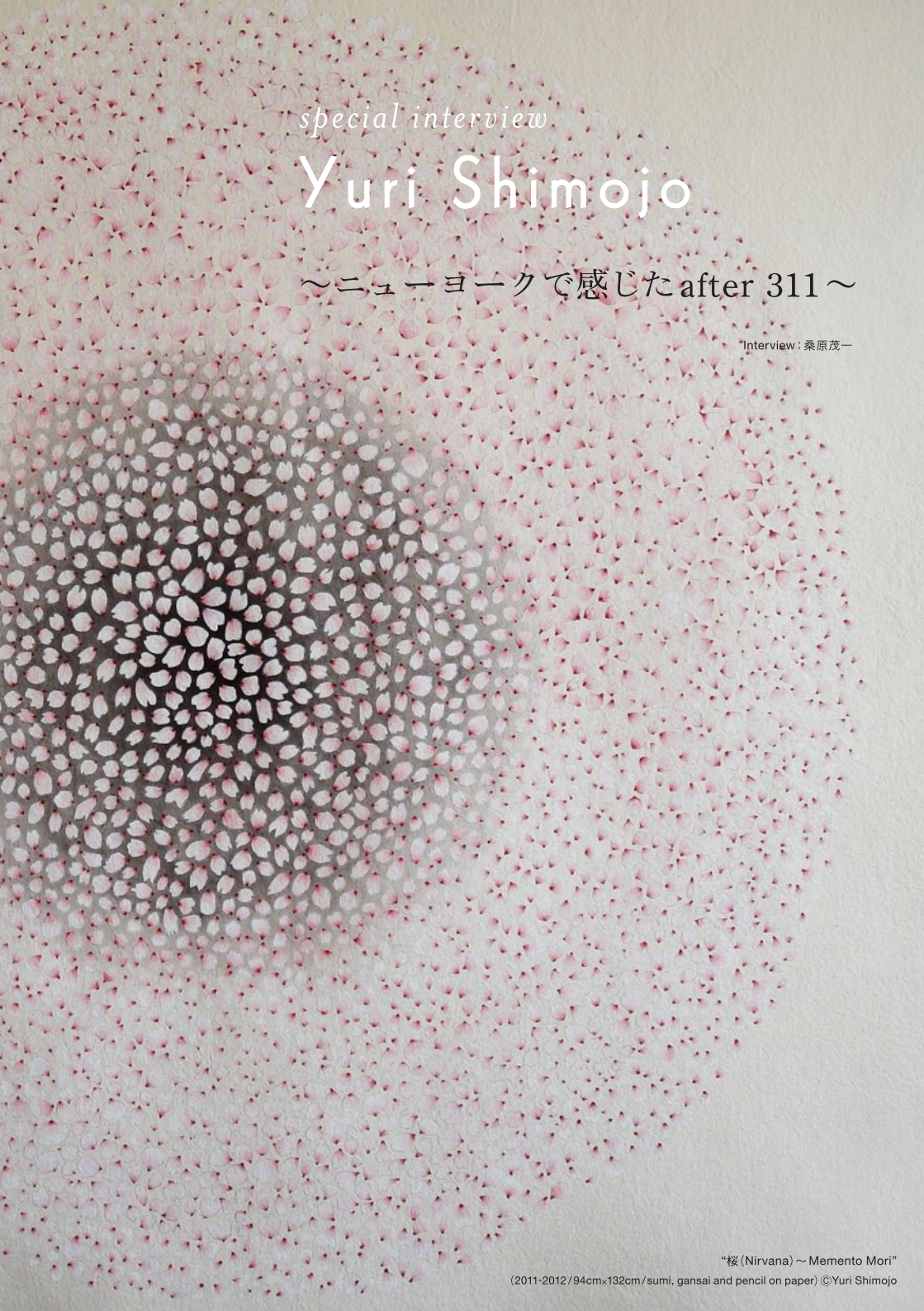
special interview

Yuri Shimojo

～ニューヨークで感じたafter 311～

Interview：桑原茂一



“桜（Nirvana）～Memento Mori”
（2011-2012／94cm×132cm／sumi, gansai and pencil on paper）©Yuri Shimojo

311から1年経った今。
アート作品とともに下條ユリさんが伝えたいコト・想い。

911と311

――911の時、ユリちゃんが、送ってくれた情報は、それまで日本のメディアから伝わった情報とは大きく違いました。

わたしも、おどろきました。NY市民としての911の体験が、不条理な世の中に対する意識革命を芽生えさせたんだと思います。

――日本のメディアには目に見えないフィルターがかかっていると気づきました。当時dictionaryに掲載させて頂いたユリちゃんのレポートのお陰で、私たちはニューヨークで起こった911の現状をより正しく理解出来たのです。

その違いを証明するべく、あそこまで生々しい日記全文を掲載してくれたメディア『dictionary』に感銘・感謝しました。そして、ただの日本のサブカルチャー誌ではない、ということを、桑原茂一という方が日本になにを伝えたいか、‘教育したいか’の本気を知りました。まさに“知恵の辞書”であろうとしているんだ、と感じました。

――そしてまた今回の震災のことも、ユリちゃんが教えてくれたBBCのドキュメント“Japan's children of the tsunami”を見ることで、大切な視点が抜け落ちていることに気づかされました。

一般の日本国民には知られていない、日本の事実にせまる海外のジャーナリズムには無視できないものがたくさんありますね。

――911の時と同様に今回の自国で起きた悲劇でさえ外国に住む方々からの視点に頼らなければ現実を正しく把握出来ず、自責の念にかられます。もちろん、911の時代と違い現在はインターネットの時代ですから、大手メディアを鵜呑みにはしていませんが、国民の意識を大きく左右してしまうはずの大手テレビメディアがこんな風に弛緩してしまっている現状に異を唱えない日本は本当にこれで文化国家と呼べるのでしょうか？　自分自身の不甲斐なさも含め強い憤りを感じます。

在外日本人の多くの人が震災後に帰国した感想の中で共通なことがあります。それはあまりの“なにもなかったかのような状態への違和感”に、‘恐怖感’を感じたということです。「震災前と同じ状態に」という政府のプロパガンダ、それに合わせるかのようにメディアは「もとどおり」になっていったんでしょうね。「なにもなかったフリ」をすれば「もとどおりのフリ」もできますけど、それは自分の国の変革期を無視していることになると思います。

311をニューヨークから見つめて

――311のニュースを耳にして、一番最初に何を思いましたか？

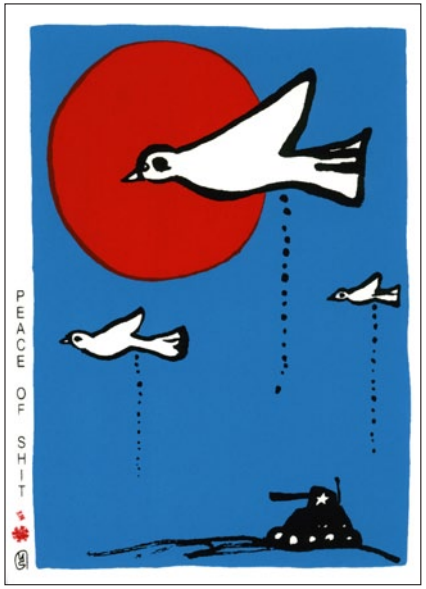
家族どころか、今度は‘ふるさと＝自分の国’がなくなってしまうんじゃないかと思いました。

――311があなたの作品に与えた影響はありますか？

911の後に『Peace of Shit』という反戦・環境問題をテーマにした作品を発表しました。世界中で今も人気があり、いろいろな形で広まっています。アートが確実に意識革命に貢献できるという自信を持ちました。でも、911の後のアメリカ政府＆メディア・アメリカ人の反応と、311の後の日本政府＆メディア・日本人の反応を比べて思うことがあります。プロパガンダの戦略が、国民性の違いから、ある意味真逆に思えるんです。アメリカは恐怖感と緊張感をあおって、日本は大丈夫感と出る杭は打つ感をあおる。だから革命を起こすにも、戦闘的な正義感で団結っぽく盛り上がるアメリカ人と、沈着冷静に癒し助け合いながらの日本人という風に趣の違いがあると思うんです。アメリカ人はプロテスト好きだけど日本人はリサーチ好き、みたいな。

NYに拠点を移す’97年以前のわたしは、日本でイラストレーターをしていました。イラストレーターというのは、主にマスメディアに向けて視覚的に商品や情報を売るお手伝いをするわけで、大袈裟に言えば社会に向けて戦略みたいなものを意識して絵を描くんです。少なくともわたしはそういう部分マジメにやってたんですヨ（笑）。そんなことを考えながら、じゃあ今の自分は絵というユニバーサルな伝達方法で、なにか日本の社会に伝えられないかな、というところにふと立ち還ったのです。

「イラストレーター・下條ユリ」時代、家族の死や別れをたくさん経験したある日、わたしは「じぶんのため」に描きたいと思う人生の岐路に立ち、日本を離れてからは自分を探求するための自己表現として描いてきました。でも、震災後



“Peace of Shit”（2003）

に動物や自然たちと対話すればするほど、「わたしたちの叫びを描いて伝えてくれ」の声が聞こえてくるし、日本の現実を知れば知るほど、これほど「だれかのため」に絵を描かなきゃ、と思えたことがありませんでした。まあ結局はそれも自分のためなのですけどね。というわけで、311後、‘宝の持ち腐れ’と化していた（笑）自分のイラストレーション・スキルをtoolにして、具体的な目的を果たすための絵、物語を伝える絵を描いたわけです。でもそれは現実という物語。そういう意味で言えば、311があったからこそ今、自分が伝えたい事を描きたい、と。それもその絵を見ながら子どもと大人が一緒に会話ができる役にたてたら、そう願ってあの絵が産まれました。

――ご自身の中で、作風が変わったと感じたことはありますか？

いつも変わっていくなかで、自分の普遍性を探るのが最近楽しくなってきました。

“Voices from 2011”と『日本と地球とこどもたちへ』

── “Voices from 2011”を描かれたのはいつですか？

日本から戻った、去年の夏です。原画は911の10周年を記念したArtivist*たちによる“LA vs WAR”に出展しました。『NYで911を体験した日本人の311への想い』というメッセージも込めました。

*Artivist＝Artによる活動家/Activistのこと

──どういう気持ちでこの作品を描きましたか？作品に対する想いをお聞かせください。

“Voices from 2011”の絵は、タイトルそのまま、2011に自然が発した声です。自然の神々が至る所に宿り、縄文時代から人と自然が共存してきた奇跡の火山島、日本から世界へのメッセージです。

わたしは、人間が太古のむかしに動物や自然界と第六感を使って対話をしていた時代のコミュニケーションの修練をしています。もともと世界の土着シャーマニズムに魅かれ学んできました。自然・動物界から人間は癒されも降状もします。いつしか人間のゲームの犠牲となってしまった彼らの声を聞けば聞くほど、その声を伝えなければ、と必要に迫られ絵を描きました。わたしは出産を経験したことがありません。去年の検診で「まだまだいける」と言われ、なんか照れちゃいましたが（笑）、たぶんもうないでしょう。でも、子供を産まなかったかわりに、なにか別のものを産んでゆく運命にあったんじゃないか、って最近思います。母性が、作品に自然とでてくるようになった気がするし。

とにかくこれからはどんどん、人間と自然との共存、土着の文化・精神性の継承、そして母性中心の世界に還ってゆけば良いのだと思うのです。福島で立ち上がったのもお母さんたちでした！　“原子カムラ”だか“原子力村”だかよくわかりませんが、地球の環境状態を思ったら、どんなにお金を貯めたって、みんな住めなくなっちゃうんです。動物たちや自然界の言うことを聞いた方がいいに決まってるんです。人間がいちばん愚かな動物になっちゃってるってこともわかってないほど愚かなんだから。

──この作品の中にETを描いた意図を教えてください。

東日本大震災は、宇宙的な問題でもあるわけで。この絵の中にはいろいろな謎解きが隠されています。たとえばガラスケースの中の地球、太平洋に写っているのはムー大陸です。

──『日本と地球とこどもたちへ』というメッセージについてお聞かせください。

1年目をむかえた今年の3月11日、“Voices from 2011”の絵を『日本と地球とこどもたちへ』という手紙と一緒に日本や世界中の友だちに送りました。わたしはFBもtwiiterもしていないので、久しぶりに大切な友だちへ「この絵で気持ちがつながる役に立てるのなら自由にシェアしてね」って書いて送ったんです。そうしたら反響が大きく、いろんなところで輪ができたようです。それだけ同じ気持ちの人が多いんだってこと、とてもうれしかったです。送る前、

日本と地球と子どもたちへ“Voices from 2011（2011年からの声）”

未来をつくってゆく子どもたちのために、動物、自然界からの声を描きました。
「よろしくたのむね」と「ごめんなさい」の気持ちをこめて描きました。
いつの日か、人と自然がいっしょに美しい地球で平和に暮らす日が来ることを想って。
この絵を見る子どもたちと一緒に、お父さん、お母さん、おとなに会話をしてほしい。

1年。
2011年におきたこと、感じたこと、そこから学ぶことを決して忘れずに。
この絵がそんなお役にたてていただけたらすばらしいと思います。
ご自由に広めてください。

2012年3月11日
下條ユリ Yuri Shimojo

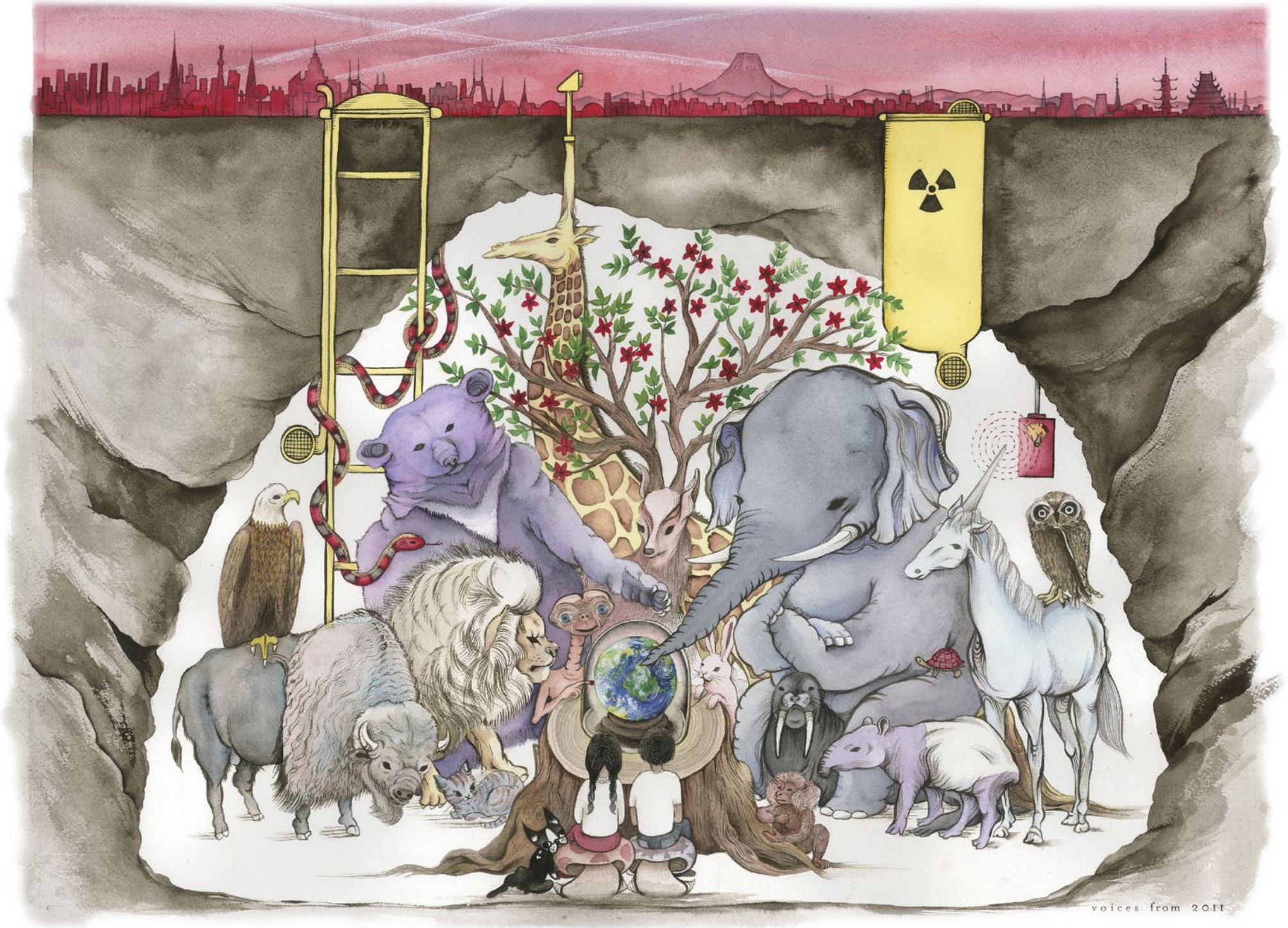
これを受け取った日本の友だちは、もしかしたら「かなしいことは思い出したくない。暗いことは考えたくない」と思うかもしれない、と慎重に考えました。でも、外国で暮らすわたしの無神経さを責める人がいても、アーティストのエゴだとアゲアシとられても、1年目という節目のこの『おしかけメッセージ』から、人がなにかを感じ取ってくれたら、自分がアートに託す夢につながる。自分が生ある間に少しでもなにか未来に貢献できれば、と思ったんです。たくさんの人、とくに日本の人に見てもらいたくて描いたわけだし。

鶴プロジェクトについて

◆鶴プロジェクト　Tsuru Project
折り鶴を通してニューヨーカーに日本を伝え、
世界からの応援を日本へ贈る復興支援活動
http://tsuruproject.wordpress.com

──どのようにしてはじまったのですか？

311直後は、日本との距離（地理的なもの以上に、入ってくる報道、それ故の認識の違い、様々な距離感）からくる孤独感、そして自分がどれだけ母国を愛する日本人かというアイデンティティを主張したくなりました。離れれば離れるほど、“自分のルーツ”を意識する感覚です。遠くにいるからできないことを悔やむより、遠くにいてもできることをしました。たとえば浜岡原発停止の嘆願書を英訳して世界中に送ったり。「NYのアーティスト」という立場では、当時あらゆるアート・オークションのイベントがあり、わたしも絵を寄付し、チャリティーにいくつも貢献しました。でもあの時に一番忘れられないことと言えば、友だち、知り合い、道ですれ違う人、お店の店員さんまでもが「日本人か？がんばれ！」「なにかできることはないか？」と声をかけてくれ、関心と応援を贈ってくれたんです。山ほどある泣け



"Voices from 2011 (2011からの声)"
(2011/46cm×61cm/gansai on paper) ©Yuri Shimojo

るエピソード、すべて伝えたいくらい。そんな時でした、鶴を折ろうと誘われたのは。お金がなくても、有名なアーティストじゃなくても、子どもから老人まで、気持ちさえあれば誰でも参加できること、それは鶴だ！origami peace birdだ！と思ったのです。震災から1週間後、ほぼ初対面の8人が、泣きはらした目でブルックリンの近所の公園のベンチに集まったのが、鶴プロジェクトのはじまりでした。

――鶴プロジェクトへの想いをお聞かせください。

全員NYでアートに携わる大和ナデシコという立場から、日本の文化的＆精神的なアプローチと優しさ、そして美しさを大切にしました。日本、家族、友だちが心配で、だれもが絶望感と孤独感に追いつめられていた時に、こうして『みんなで一緒にただひたすら鶴を折って祈る。世界の人たちの想いを末永く日本に届けたい』という単純だけれど純粋な行為が、どれだけそれぞれのメンバーをも救ったか。日本の人たちを応援しながら一番助けられたのは自分たちかもしれません。震災を通じ、おなじ気持ちを分かち合い、家族のような絆をつくったわたしたち、夏にはNYで七夕祭りもしました。震災後、みんなで鶴を折るという癒しの行為にはげまされて「独りではない」から「一人ではできないこと」へ。鶴姫それぞれにいろいろな想いがあります。そして元気になったわたしは「ひとりでもできること」アーティスト個人の声を発する勇気をもらいました。

下條ユリとYuri Shimojo

ここ15年ほどは、Yuri Shimojoとして海外の活動がメインでした。googleしてみると、下條ユリとYuri Shimojoの情報量の差、内容の差、時代の差が歴然と現れます。まったく別の存在みたい。意図したわけではないんだけど、たぶんそのふたりを同一人物として知る人は少ないと思います。

生い立ちの記『ちいさならくがき』が数年前に復刊された他は、しばらく日本で活動をしていないため、下條ユリの情報はほとんど10年以上前のものばかり。タイムトリップするように奇妙です。その間に日本はブログが盛んになり、人々のプライベートには登場させてもらってるんですけどね。今回「下條ユリっていったい誰？！」って検索した人は、謎の正体（?）にわけわからないことでしょう。ま、dictionary だから「あ、ユリちゃん、懐かしい！」と東京90年代までの不良趣味人界隈が思い出してにやにやして下されば光栄ですけど（笑）。

2000年以降は、Yuri Shimojoとしてブルックリンとハワイの秘境を拠点に、精魂すりへらし恋愛に翻弄する、わがままにボヘミアンで罰当たりな生活を送り、言葉にできぬ感情と向き合うために絵を描いてきました。Barnstormersというアート集団の一員でもありました。東京の90年代、ブルックリンの2000年代と、『続・ちいさならくがき』書いちゃったらそりゃまたもう濃くなります（笑）。

しもじょうゆり、本名は'理が有る'と書くんです。なんか下條有理って字面、不条理に見えません？　それ、けっこう気に入ってます。震災前、"たまたま"ご先祖さまに「『武士道』を読め」とお告げを受け（笑）、読み返していたりしたもので、今回の震災に福島を想う時、自分が会津藩士末裔であり、20代にして天涯孤独となってしまった希有な運命を持つ性、というカルマ的なルーツへも還ってゆくんです。いろいろな不思議な話があるんですよ…茂一さんが以前、ダイアリーに書いてくださってましたよね、背負っちゃったヘヴィな家系…まったくヘヴィなんですが、正真正銘のラスト・サムライ・ボヘミアンだ、って言うと少なくともガイジンは「cooool!!」と言ってエキサイトします（笑）。

311震災以降
癒しのために描いた"祈りの絵"

――311以降"Voices from 2011"の他に、どのような作品を描かれましたか？

『桜』（Nirvana）という作品を描きました。去年の春、被災地にも桜が咲き始めたというニュースを聞き、清らかに涙がでました。桜という、日本人の美意識、Lifeの象徴を描くというのはクリシェかな、ともはじめは思ったんですが、溢れる想いと祈る気持ちで、お坊さんがお数珠を一珠一珠数えて瞑想するように、ただただ桜のはなびらをおおきく、まるく描くことは、わたしを救ってくれました。わたしは自分のために絵を描く時、イラストレーションとちがうのは、最後までなにが描かれてゆくのかわからないのです。なにかに導かれるままに描きます。この桜も、描いてゆくうちに、一枚一枚はなびらがよく見るとそれぞれ個性的でちがうように、ひとりひとりの命に見えてきました。それも、愛する人を残してあちらへ旅立った女の人たち。結果、それは『桜』（Nirvana）、『藻』（Styx）、『蔦』（Passage）という大きな水彩画の三部作として、生と死、日本人のそれに対する諸行無常という強く美しい精神性、そして個人的なあるできごとに対する自分の想いのレクイエムという絵になりました。それって、たぶんわたしが永遠に描きたいテーマなんだろうと思います。

――『桜』に対する想いをお聞かせください。

"Voices from 2011"のように、ストレイトに伝えることが目的なイラストレーションとちがい、『桜』のような絵は言葉にする必要のない人間の想いです。観る側がどう感じるかも自由です。

一枚一枚ちがう表情のはなびら ～"桜（Nirvana）"

でも、そこにさえなんらかの共感がある時、芸術は人のこころに響かせる魔法がある、絵を描いていてよかった、としみじみ思えるのです。

――最後にメッセージをお願いいたします。

「自分になにができるか」じゃなくて「自分がしたいこと」でお手伝いすればいいんだと思います。

下條ユリ　Yuri Shimojo

丙午の春、東京都三鷹市生まれ。自由な生き方そのものを絵と文で表現し続けている。
武士の家系の伝統を重んじつつも型破りな両親は、彼女に幼い頃より日舞、能、茶道、華道を習わせると同時に、"社会教育"と称し国内外のあらゆる遊芸三昧の場に付き添わせ、普遍性を尊重する国際人として育てる事に熱心だった。究極の和洋折衷というカラフルな生い立ちの記憶が、下條の創造性の原点であると言えるだろう。
現在は、ブルックリンのスタジオとハワイの秘境にある隠れ家、という両極端なジャングルの行き来を自己のイン＆ヤンのバランスとして楽しんでいる。
下條ユリはまた、世界の土着シャーマニズム研究者として動物や自然界の生物との対話、交流を修練し、エネルギー・ヒーリングの資格者でもある。B型魚座。水に浮くのが好き。
主な著書に、波瀾に富んだ家族との生い立ち・別れを綴った追想記『ちいさならくがき』（たまうさぎbooks）がある。
www.yurishimojo.com